

第二日 第2章 競争力モデルの変容：プロイノベーション時代

1 【×】米国における1980年代の「ヤングレポート」の時代には、プロイノベーションと人財育成のコンセプトが主流となった。

【解説】1980年代のコンセプトは技術経営とプロパテント政策 26

2 【×】米国における2000年代初頭の「パルミサーノレポート」の時代には、技術経営とプロパテント政策がコンセプトであった。

【解説】項番1と逆 27

3 【○】「複数の大企業による『切磋琢磨型』イノベーションの時代」においては、日立、東芝、三菱電機、あるいはパナソニック、ソニーをはじめとする電機産業における切磋琢磨が日本の牽引力となった。

【解説】 33

- ・トヨタ、日産、マツダ、ホンダ、三菱、いすゞ、スズキの自動車業界の切磋琢磨
- ・ニコン、キヤノン、ミノルタ、ペンタックス等のカメラ業界や富士写真フイルムと小西六の写真フイルム業界の切磋琢磨
- ・富士フイルム、TDK、ソニー、日立マクセル等の磁気材料の切磋琢磨
- ・日本ビクター、松下の<VHS>連合軍対ソニーの<BETAMAX>陣営の切磋琢磨